**曹洞宗大本山總持寺・ニコニコ法話　　　　　　　　　　　　　　　　　　 令和6年5月**

**本山布教教化部長　花和浩明**

大本山總持寺では毎年4月10日から16日にかけて、報恩大授戒会が修行されます。曹洞宗の授戒においては、一般的に16条の菩薩戒が授けられます。

その16条の一つが戒です。「ることなかれ」という意味の戒ですが、御開

山瑩山禅師と「」にまつわるこんなエピソードが残されています。

瑩山禅師は、幼い頃より信仰深く、また仏教の理解にも長けたお子さまでした。数え8歳の時に出家を志し、永平寺で修行を始められます。禅師のお母さまは、禅師が最後まで修行を成し遂げ、立派な僧侶となって多くの人々を尊い仏道に導いてくれることを、心から信じておられました。ただ、一つだけ心配な事がありました。それは我が子の怒りっぽい性格の事でした。

その心配が現実になりかけたことがありました。19歳になられた瑩山禅師はで、修行僧の指導を任されました。ある時、ひとりの修行僧の反抗的な態度がどうしても許すことが出来ず、思わず叩こうとして腕をふり上げてしまわれたのです。そうしたところ突然体が動かなくなってしまいました。

その時禅師は、背後に必死で止めようとされているお母さまの気配を感じられたそうです。お母さまは、禅師の修行が何事もなく続きますようにと毎日祈られていました。その祈りがおそらく禅師のもとに届いたのでしょう。禅師は、涙を流して反省され、お母さまのためにも決して瞋の心は起こすまいと誓われたそうです。それから禅師は、だれに対しても慈悲の想いで接するように努められたと伝えられています。

瞋は古来、仏道を妨げる三毒の一つに数えられます。瞋に対して瞋で返しては、決して瞋は止むことはありません。エスカレートし続けると悲惨な戦争をも導きます。

禅師のエピソードから私たちが学ぶことは「瞋に対しても、慈悲の想いを返していく」ことだと思います。これを続けていくことが出来ればいつかは、「誰からも慈悲の心を向けられるようになり、だれに対しても慈悲の想いを返していく。」そのような日常を手に入れることが出来るのではないでしょうか。